民俗資料即1994, 3, 25 発行加茂市民俗資料館

創刊号 1994. 3, 25 発 行 加茂市民俗資料館

創刊にあたって

加茂市民俗資料館長 伊藤武ク

近年の社会の変化は急速に進んでおり、10 **王一昔が5年一昔、3年一昔といわれるほど** 進歩しております。

したがって、郷土の考古・歴史資料も忘れ さられる状況になりつつあります。

当民俗資料館は、旧下条中学校の校舎を転 用し、昭和49年8月に開館したものです。 収蔵品はすべて市民から寄贈・寄託をうけた もので、考古・歴史・民具資料などを保存・ 展示し、現在は民具資料約4,000点、考古・ 歴史資料約4,000点の多くにのぼっており過 去における庶民文化が一歩ずつ向上していく 足跡を知ることができます。

民俗資料の大部分は特定の人の創造ではな く一般庶民の生活の中から生まれたものであ り、私たちを育んでくれた自然とともに郷土 の心のよりどころでもあります。

私たちはこの文化財を失うことなく子孫に 受け継ぐべき責務があると考えます。

以上、一人でも多くの皆さんからご理解を いただきたいことから「加茂市民俗資料館だ より」を発刊いたしました。

今後、展示方法など研究しながら、より親 しみやすい資料館にと考え、努力してまいり ますので本紙発刊を機により多くのご利用を お願いし発刊の言葉といたします。

民俗資料館に期待する

加茂市文化財調查審議会委員 溝口敏麿

加茂市民俗資料館は1974年(昭和49年) に開設された。高度経済成長期を経て変化 した時代相のなかで、使われなくなった先人 達の生活と生産の用具を、歴史的・民俗的資 料として保存しようというものであった。以 来20年、寄託・収集された資料は膨大な数 に上り、いずれも、失われたら再現できない 貴重な物ばかりである。民俗資料館開設の意 義はまことに大きかったといって良い。しか し、旧下条中学校の廃屋を転用した老朽施設 はとうに手狭となり、展示できるものは限ら れるなど、欠陥が顕著である。肝心の専門職 員も明らかに不足している。

近年「ふるさと再生」・「生涯学習」の言 葉が示すように、往事の社会生活を見直し、 住民が生涯かけて学ぶことの意義が説かれる ようになった。県内各地でも充実した歴史・ 民俗資料館や博物館が開設され、村おてしや 町おこしに役だっていると聞く。我が加茂の 民俗資料も、箪笥、建具、はた織り、和紙の製 造等、他にないセールスポイントを持ってい る。20周年を迎えた民俗資料館が、広報誌 の発刊を機に、関係者の理解を得て一層の充 実と活性化をはかり、市民と共に学ぶ拠点に 飛躍するよう期待したい。

I. 民俗資料館の概要

① 創立 昭和49年4月1日

• 開館 昭和49年8月20日

② 施設 木造二階建 692 m²

・展示室 5室、収蔵室 2室、事務室 1室 ・庭園には大賀ハス池がある。

建物は旧下条中学校の校舎を転用したもので、外観は資料館というよりも学校のおもむきを呈している。しかし、中に入ると数多くの貴重な資料が類型的に展示され、木造の建物と 調和している。

③ 展示室と展示品

展示室は、1 階が、「加茂市の祭り・文化室」、「考古資料室」、「歴史資料室」の3室で、2 階は、「特産物室」、「特産・信仰・玩具室」の2室である。廊下にも展示し、1階は昔の農器具、2 階は昔の生活用具などである。

収蔵品のすべてが市民から寄贈・寄託を受けたものばかりで、民具・考古・歴史資料など 8,000点の多きにのぼっている。

展示品の中には、加茂市指定文化財が多く含まれている。江戸末期から明治初期に製作、

使用された漢方薬製剤器。明治・大正・昭和 初期に使用された建具製造工具(130点)。 潅溉用具のてっぽう、だいろ、じゃ車。七谷 水源池・千刈遺跡から出土した縄文・古墳時 代の土器など実に貴重な資料である。また、 加茂紙の紙漉き用具・加茂縞のはた織機など 加茂市産業の移り変わりを知る貴重な資料も 展示している。製作に6年を要した加茂祭り の御神幸を模した紙人形も見ごたえがある。



漢方薬製剤器具と百味たんす

Ⅱ. 平成5年度のあゆみ

1. 入館者数

OR 1 T 2 Is	平成4年4月 ~ 平成5年3月				平成5年4月 ~ 平成6年2月		
And the state of t	市	内	市外	計	市内	市外	計
大人	3 3	2人	161人	493人	458人	137人	595人
小中学生	5 0	2人	150人	652人	450人	183人	633人
計為計	8 3	4人	311人	1,145人	908人	320人	1,228人

入館者は年々増えており、関心をおもちの方は何回も足を運んでくださる。また、小学生 による市内外からの団体見学も増え、学習のために訪れる児童も多くなっている。

2. 資料の収集

平成4年度から平成5年度にかけて、26名の方々と2団体から民具を中心に124件、 7.41点の資料をご寄贈賜りました。心より感謝申し上げ紹介させていただきます。

① 紙漉き用具一式 (13件、25点)

「加茂紙製造技術」が昭和59年に加茂市文化財に指定され、伝承者の田浦米太郎さ んが紙漉きを続けてこられた。田浦さんが亡くなられ、ご家族の方が紙漉き用具一式を寄贈 してくださった。貴重な資料である。

- ・圧縮器 1点・打解機 1点・乾燥機 1点・手あっため器2点

- ・簀 桁 3点・簀 2点・紙切包丁4点・ざぶり棒など6件11点
- ② 菓子製造器具一式(11件、342点)

明治・大正・昭和にかけて菓子を製造してこられた本町の「ますや」さんが、菓子製造を やめられたので、当時使用していた器具一式を寄贈してくださった。木型の種類の多さとそ の彫りの精巧さに驚く。

- 打ち込み木型 104点
- ・打ち込み木型紋型 29点

 - すり込み木型 85点

 - ・紙型 93点 ・押し型 12点

- その他 押しべら、匙など 6件19点
- ③ 着物類
- ・羽織、長着、浴衣、帯など 24件46点



④ 履き物

- ・わらじ、草履、下駄、足駄など 12件35点
 - ⑥ 醸造・製造用具
- ⑤ 炊事・給食用具
- ・おひつ、へぎ、鍋など 3件5点 ・みそ桶 2点

⑦ 製作用具

- 8 家具・調度類
- ・糸巻き機、そば作製器など 3件3点 ・あんどん、長火鉢、長持など10件16点

- 9 寝具 ・箱枕 2点 ⑩ 農具 ・じょれん、鍬 2件2点

- ① 計量具 ・棒秤など 3件3点 ② 楽器類 ・横笛、提琴、拍子木 3件6点

- ⑬ 商売用具 ・立売り用へぎ 2点 ⑭ 標本類 ・蝶、鉱物、蜂の巣 3件3点
- ⑤ **拓本** ・加茂山良寛歌碑 1点 ⑥ **人形類** ・雛人形など 2件3点

17 古文書

- 18 公文書
- ・五人組御仕置帳など 7件7点 ・各種調査結果報告書など 58点

19 地図類 ・須田村全図(明治42年)、下条村道の路線図など 5件7点

② 写真類 ・加茂紙の工程アルバム(写真134枚) 1点

加茂紙の工程写真(四切りサイズ)15点

額縁(四切りサイズ用)15点

20 レコード盤 ・名演奏家アルバム、古賀政男大全集など 124点

② **その他** ・神棚、染付大皿、石うす、きせるなど 14件18点

◎ 寄贈者ご芳名 (五十音順、敬称略)

石附 哲 井上信三郎 桑原 晃一 小林 六郎 斎藤 敏一 坂上儀一郎 笹川 セキ 茂野 博子 田浦嘉久司 田浦 甫 高橋 英助 高橋 則雄 高松 三郎 高松タカネ 永井 博中澤 皓 西村 國司 古川 信三 森山 義一 諸橋 秀吉山下栄太郎 涌井征三郎 加茂紙保存会 七谷小学校

〈埋蔵文化財の収集〉

① 牛ケ沢B遺跡より

牛ヶ沢 B遺跡は宮寄上字広田に所在し、加茂川左岸の河岸段丘上、標高約120mの平担地にある。平成4年5月から6月にかけて発掘調査を行い、縄文時代前期(約6000年前)を中心とする土器・石器が多数出土した。また、加茂市では3例目となる、後期旧石器時代(約3万から1万2千年前)の石器3点と市内初例の縄文時代草創期(約1万年前)の石器3点も出土した。これらのまとめとして、平成5年3月に、「牛ヶ沢B遺跡発掘調査報告書」を発行した。

② 釜渕遺跡より

釜渕遺跡は新栄町に所在し、加茂川左岸の自然堤防上、標高約6mの水田下にある。平成5年6月から7月にかけて試掘調査を行い、古墳時代前期(約1600年前)から古墳時代後期(約1400年前)にかけての土器が多数出土した。また、文政11年(1828年)に発生した三条地震による「噴砂」の跡も見つかった。

3. 館外行事

① 古文書講座

恒例の古文書講座に本年度も多くの方々が参加された。講師が用意された適切な資料と視聴覚機器を使用したわかりやすい解説に、受講者は大いなる満足と古文書に対する興味・関心をより一層高めることができた。

○開催日 6月26日、7月17日、8月7日、8月28日、9月18日9月25日 計6回 ・時間 午後7時~9時

。会場 市民体育館と旧図書館

。講師 加茂市文化財調査審議会委員 長谷川昭一氏、 関 正平氏

- 。内容 · 新発田藩領の中の加茂町について
 - 江戸期後半における加茂組の年貢米の川下げについて
 - ・ 江戸期後半の信濃川船頭仲間取り決めについて
 - ・安政6年天候不順につき下条村など手宛引き願書
 - 文政元年、加茂矢立両村上江川江浚い川幅拡張願い
 - ・ 近世加茂町の町場変遷について

· 受講者 29名

② 講演会

市内には多くの遺跡が所在し、今までに多数の遺物が出土した。発掘調査の報告と遺跡に 対する興味・関心を高めていただくために講演会を開催した。

当日は、市内外から大勢参加され、スライドを使った説明を聞き、出土した土器や石器を 眺めたり手を触れたりして、古代へ夢を馳せておられた。

○ 開催日 10月2日(十) 時間 午後2時~4時30分

。会場 旧図書館

○演題 「掘り出された加茂の歴史」 ― 近年の発掘調査の成果から -

。講師 加茂市教育委員会 学芸員 伊藤秀和

内容遺跡とは何か

- 加茂市の発掘調査(水源池遺跡、旧市役所遺跡、千刈遺跡など)
- 最近の発掘調査報告紹介(牛ケ沢B遺跡、川船河遺跡、釜渕遺跡)
- 加茂の原始時代の姿
- 。参加者 30名

レファレンス・サービス(民俗資料館への問い合わせ)

加茂市の歴史にかかわることや当館に所蔵している資料について、県内外からいろいろな問 い合わせがある。平成4年度は23件(来館8、郵便8、電話7)、平成5年度は30件(来 館12、郵便4、電話14)であった。問い合わせに対しては可能なかぎり調査をしてお答え している。

県外からの問い合わせの主な内容は次のようなものである。

- 日本で最初にマカロニを作った加茂市の石附吉治氏とマカロニに関することを知りたい。
- 加茂にかかわりのある江戸後期の俳人、「義珍、雪堂」について調べてほしい。
- 加茂次郎義綱公について知りたい。また、剣法秘伝書があったら知らせてほしい。
- ・新田義貞・義助以降の系図並びに新田義宗の伝説について知りたい。
- 加茂で作られていた、「松原人形と陣ケ峯人形」について参考資料を送ってほしい。
- 加茂市民俗資料館に展示してある、「加茂縞のはた織機」の資料がほしい。
- 加茂紙の歴史と特徴について聞かせてほしい。など。

長福寺の開基年代について

- 採集遺物の紹介から -

加茂市教育委員会学芸員 伊藤秀和

1. はじめに

長福寺跡は、加茂市下条長福寺に所在する。寺名が地名として残り、付近には元仁王、鐘つき堂、天徳寺などの地名が残存する。寺跡は、国道 403 号線から、東に約 2 kmで、下条川の支流である大平川右岸の小高い丘に立地する(第 1 図)。標高約 18 $m\sim 25$ m で、現在は棚田として利用されている。

この長福寺跡については、古文献や遺品からの検討により、おおむねの存続年代が知られるが、なお明確になっているとは言えない。本稿では、長福寺跡の開基年代を、採集された中で陶器から考えてみたい。

2. 長福寺跡研究略史

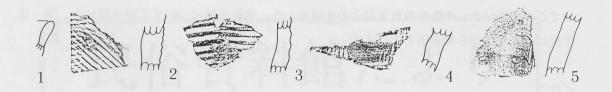
長福寺跡については、中富氏と関氏の論考に詳述されている(中富 1965、関 1975)。主として、慶長三年(1598)の上杉景勝の会津移封に伴う長福寺閉山後の遺品の動向が中心で、開基年代は明確にされていなかった。これに対し関氏は、『ふるさと歴史散歩』誌上で、「長福寺の開基年代は南北朝時代とみられ、「金沢文庫」第12輯に「越後国賀茂長福寺開山長智長老」とあり、僧長智の開山であることがわかる」と述べられている(関 1986 a)。また、『新潟県の地名』誌上で、「開基年代は不明だが、「宝寿院文庫目録」の灌頂式私耳書の奥書に「延文

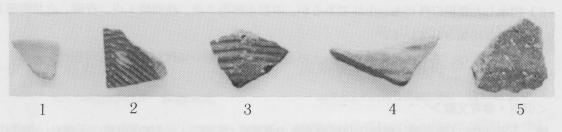
四年極月日、於越州青海庄長福寺、灌頂式伝受時」と記され、南北朝期には寺はあったと思われる」とされている(関1986 b)。さらに、近年、関氏は「中世の加茂地方についての一考察」の中で、長福寺関係の古文献の紹介を行い、「長福寺文書」中に、延文二年(1357)に長智の名が見られることなど明示し、開基年代の史料を提示された1)。

上記から判断すれば、現段階の開基年 代の下限は、延文二年(1357)になり、 14世紀後半は下らないものと考察され る。つまり、長福寺は約240年間以上の

第1図 長福寺跡位置図(国土地理院1/5万 加茂)

歴史を持つことになる。





第2図 長福寺跡採集の中世陶器 S=1/2

3. 採集遺物について

ここに紹介する遺物は平成4年に三条市上保内在住の青山誠八氏が、遺跡地内にて採集した もので、加茂市民俗資料館に保管されていたものである。

図示(第2図)したものは、いずれも珠洲焼の破片である。1は、小壷の口縁部片で、端部上面は丸くおさめられる。灰色を呈し、焼成は堅緻である。2は、壷の胴部片でタタキ成形の T種と思われる。タタキ目は、比較的浅く、交互斜めの綾杉状に施される。暗灰色を呈し、焼成は堅緻である。3は、壷あるいは甕の胴部片で、やや太い条線のタタキ目が施される。灰黒色を呈し、焼成はやや不良である。4、5は擂鉢で、4は内面に細く強い卸目が間隔をあけて刻まれる。灰色を呈し、焼成は堅緻である。5は2条の卸目しか確認できないが、4に比べやや弱く、太い原体で間隔をあけて刻まれるようである。暗灰色を呈し、胎土に小礫を含む。焼成はやや不良である。

珠洲焼の編年区分は、吉岡氏によって $I \sim WI$ 期区分が示されているが(吉岡 1989)、これに対応させれば、タタキ目や卸目の特徴などから、おおむね $IV \sim V$ 期に比定できよう。吉岡編年での実年代は、IV期が 1 4 世紀、V期が 1 5 世紀前半に比定されている。ゆえに本資料も、この時期の幅におさまるものと考えたい。。

4. おわりに

上記の所見から、図示した採集遺物は、現段階で文献史料から窺える長福寺の開基年代にほぼ相当するものと考えられ、文献史料を裏付ける史料と言えよう。しかし、わずかの破片資料であり、器形が不明であることから、年代の比定は推測の域を出ない。なお厳密な時期比定には資料の増加が必要である。今後は、文献史料と考古資料から窺える長福寺の存続年代に、より近い接点を見いだすためにも、学術的な発掘調査を実施する必要があろう。

最後に、小文を草するにあたり、資料を紹介することを快諾された青山誠八氏、珠洲焼につ

いてご教示頂いた、中条町教育委員会の水澤幸一氏、文献史料についてご教示頂いた、関正 平氏に、文末ながら感謝申し上げます。 (94.1.20)

<註>

- 1) 1993年11月18日に開催された、「越後・加茂を知る歴史ゼミナール」の講演会資料である。
- 2) 図示した資料以外にも、小片であるが、中世土師器 2点、珠洲焼 1点、青磁、近世陶磁器 2点が採集されている。
- 3) 第2図3は、タタキ目の太さや胎土のあまさから、やや年代が下降する可能性がある。

<引用·参考文献>

関 正平 1975「第2節 璃瑠山長福寺とその遺跡について」 『加茂市史 下巻』 加茂市

関 正平ほか 1986 a 『ふるさと歴史散歩』 加茂市教育委員会

関 正平ほか 1986 b 『新潟県の地名』 平凡社

田中耕作、鶴巻康志ほか 1990 『三光館跡・宝積寺跡』 新発田市教育委員会中富敏治 1965 「璃瑠山長福寺考」 『研究紀要』No.1 新潟県立加茂高等学校吉岡康暢 1989 「総論 珠洲古陶」 『珠洲の名陶』 珠洲市立珠洲焼資料館

長福寺の資料集め

加茂市文化財調査審議会委員 関 正 平

慶長3 (1598) 年、上杉景勝の会津移封に従って、下条から消えた「長福寺」についての 興味は、もう20年余りも前のころから続いている。はじめの頃は、下条に残るいくつかの遺 留物についての資料集めに終わっていた。ところが昭和58 (1983) 年ころ、中世史専攻の 金子達氏より、『金沢文庫古文書』第12輯に長福寺のことが掲載されていることを教えて戴き、 ここで初めて長福寺の開山が、長智上人であることが分かった。

次いで昭和62年1月、加茂市新町の川口修作氏を通じて千葉県八日市場市在住の林秀三郎氏から、同市の長徳寺に残る古文書と山崎貞幹編の資料集『ちょうとくじ』を戴いた。この中で、越後国賀茂郡長福寺開山長智とある他に、「延文二年(1357)閏七月、金剛仏子長智満七十歳」などの新事実を発見した。これから推考すると、長智上人は越後国の守護として進出してきた上杉氏とともに越後に来て、下条で長福寺を興したことになる。あの長福寺谷の一角に、少なくとも約240年は、長福寺が存在したことになる。

<編集後記>

本年は当館の20周年にあたります。その節目の年に、「館だより」を創刊できますことを 喜んでおります。加茂市文化財調査審議会委員の溝口敏麿先生並びに関 正平先生より玉稿を 賜りました。誠にありがたく心より厚くお礼申し上げます。「館だより」を通して更に当館へ のご理解とご協力を賜りますようお願いし、併せて、皆様方のお越しをお待ちいたしております。